

12月6日 逍遙 

程なく、左手に純和風の建物。猫のワタシの眼に、白壁といぶし銀の和瓦が一層鮮やかに浮かび上がります。どうやら、これが、血糖値を気にしながらも甘い物好きの逍遙館長さんが話していた、和菓子の老舗本店のようです。

第11代藩主・島津斉彬が江戸から連れてきた菓子職人に由来する、この老舗の一角には、ワタシの目の高さに「木屋町通」と刻まれた石碑一つ。現在の百貨店の1号館と2号館の間の通りが昔そう呼ばれていたようです。

この百貨店の創業者は今の山形県の出身で、大坂で染料の原料の紅花や呉服などを扱っていたものの、当時の第8代藩主・島津重豪による開国主義的な産業振興策を頼って薩摩に移住したのだとか。当時、この呉服商の正面入口はこの木屋町通に面していたのだそう。ただ、この辺りは頻繁に火災が発生したことから、木屋町の「木」が「火」を呼び縁起が悪いとされ、重豪が陰陽五行説により「金生町（「かなふまち」。現在の「きんせいちょう」）に改名させたのだそう。街の名にも、深い歴史の紡ぎがあるんですね。

次回「路面電車が語る先読み力、のこころ」

継承と変化が  
紡いできたもの、  
のこころ

